

2011年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
手袋に五指の自由をとどこめる
元日の満月万物を清む
色を消し光となりて独楽うなる
春浅き池の呪文のやうな泡
水音に添ふ早春の歩の弾み

横浜 下島 緑
大綿や今年は偲ぶひとありて
母を訪ふ綿虫浮かぶ木戸押して
霜柱始発電車へひと急ぐ
炭斗や父の匂の奥座敷
骨折の手首不自由年用意

藤沢 藤田 富子
底冷えの堂の菩薩の細き見目
冬日和ビルのはざまにスカイツリー
冬の古都裏道走るりすの影
コンビニのおでんの匂ひつい求め
湯豆腐のひとりの鍋の幾年か

さいたま 宮崎 美智子
火の気なき陶窯にさす冬日かな
冬晴や秩父連山際立ちむ
豪華船夜目に燦々冬の海
案内の僧のやさしき十夜寺
先着の白鳥七羽見にゆかな

町田 小森 まさひこ
投句締め8時てふ一門の寒稽古
切り竹の面の少し古びて松あける
洋館の日差しを集め冬薔薇
水仙の斜面を落ちて香は海へ
風花の一つに始まる空の彩

2011年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
山風も海風も好き青き踏む
春潮をすべり七つの海へ旅
花人にのっとられたる北の丸
飯蛸の足の右巻き左巻
あたたかや心ゆくまで海を見て

横浜 下島 緑
ぱっちり咲く白梅に励まされ
うすみどり秘めたる梅の白さかな
ひとところ雪を残して梅かほる
馥郁と日向の匂う梅日和
万葉の昔も斯くや梅かほる

藤沢 藤田 富子
露座佛の余寒のなかに笑みおはず
春寒し古刹の廊のきしみかな
山巒にうっすら積もる春の雪
皮脱いでふわりと光る猫柳
空っ風に吹かれて渡る跨線橋

さいたま 宮崎 美智子
風花の那須野ヶ原や旅半ば
水仙郷俄か商い老夫婦
野焼の火煙のなかに人の影
春節の人に押されつ食む饅頭
春節や極彩色の廟宇なり

綾瀬 岡田 洋子
日溜りに色ちりばめて犬ふぐり
夕日浴び雪解滴にしきりなる
点々と芝にのこりし雪の嵩
良き雨の欲しき狭庭の梅固く
あやす子に癒されてをり春日向

町田 小森 まさひこ
菜摘みに出て霜摘む指の先
里山の境をなして木瓜の花
枕辺の携帯電話春の朝
み吉野のつらなる峰や春の空
み吉野の谷にすぐ来る春の暮れ

2011年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
駅頭も海辺もゴールデンウィーク
卯浪寄す水平線を上下して
なにかゝる螢袋を灯すもの
どくだみと呼ばれけがれのなき白さ
若竹に触れ新しき風となる

横浜 下島 緑
大地震に救出されし犬の春
息つめて待つ鶯のつぎの声
戯れてゐしが仔猫のもう眠り
遠蛙夜毎に声のととのひ来
毀たるることを知らずに鳥の巢

藤沢 藤田 富子
たてつづく地震にふるへ春寒し
葉桜となりて城跡に人まばら
花吹雪無情の風に宙を舞ふ
やまつつじ燃ゆる想ひの紅に
北の便り和みの桜咲きそむと

さいたま 宮崎 美智子
子を送る思いで見上ぐ帰る鳥
花吹雪下校の子等へ惜しみなく
ふらり出で桜吹雪に酔ふてをり
肩書きをひと先づ置きて花の宴
橋くぐる船にも桜吹雪かな

綾瀬 岡田 洋子
日溜りに色ちりばめて犬ふぐり
夕日浴び雪解滴にしきりなる
点々と芝にのこりし雪の嵩
良き雨の欲しき狭庭の梅固く
あやす子に癒されてをり春日向

町田 小森 まさ彦
卯波立つ海女は無言で火を囲む
水軍の隠れ入り江に卯波立つ
鳥影の早瀬に育つ鯖であり
どの家もよしう広げて鱈を干す
船虫の群れの動きに音もなし

2011年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
夕闇に網打つ烏瓜の花
遠ざかる雷鳴に人動き出す
きちかうのさゆれ惣門跡とのみ
潮風が好きで日焼を怖れをり
海鳴りと月のナイター外野席

横浜 下島 緑
満満としてさざ波の植田かな
あをあをと大き茅の輪に身を入る
ゐるらしき茂の中の鳥かな
熱き茶と鱈ずしあれば足るひとり
きっちり豆腐沈みて水涼し

藤沢 藤田 富子
さつき萌ゆ米寿の友の上梓受く
春昼の試歩にまぶしき日差しかな
リハビリのきびしさに耐へ汗みどろ
一片の雲なき空や朴の花
窓開けてため息まじり梅雨の空

さいたま 宮崎 美智子
義仲寺へ納むる一句夏来る
人気なき石山寺の青葉かな
水色の子鮎の釣果眺めをり
こんこんと湧きて流るる山清水
水無月の不意に音する鹿威し

綾瀬 岡田 洋子
逆上がりまだ出来ぬ子に若葉風
日陰なる庭の石楠明かりかな
夏草の伸び遅しき雨後の庭
白樺の湖畔一周背ナに汗く
薫風に音響かせて馬車過る

町田 小森 まさひこ
朝曇りテントサイトに手順有り
雪溪の汚れ削って登山道
この景色このお花畑のための旅
雲海の上に富士有り吾もあり
山稜や夏夜空のど真ん中

2011年9～10月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
秋草に置く高原の夜の湿り
揺れやすき心くすぐるゑのこ草
人よりもおどろきやすき穴まどひ
重ね合ふ葉擦れに秋の深まり来
雲をぬぐたびに大きくなりし月

横浜 下島 緑
つま先をついと過ぎりし蜥蜴の尾
雨脚の止めばまた降る蝉時雨
百人に百の思ひ出夏休み
思ひ出のつぎつぎと麦藁帽子
空港の雑踏にみて夜の秋

藤沢 藤田 富子
羅に博多帯締め情緒あり
日一日と仕草覚える孫の夏
盂蘭盆会又名の消えし人命簿
疾病に不安のよぎる極暑かな
動くほど背筋を汗の流れけり

さいたま 宮崎 美智子
遠花火闇をすかして見てをりぬ
縁先に息もつかせぬ虫を聞く
黒揚羽影絵のやうにうつりけり
真夜となりサボテン白々咲き揃ふ
神輿担ぐ外人意気の揃ひたる

綾瀬 岡田 洋子
手花火に小さき膝が揃ひけり
せがむ子のあと一本と庭花火
寝苦しき夜の風鈴途絶えがち
手入れ欠き芝にねじ花林立す
咲きのぼる茎太々と立葵

町田 小森 まさひこ
遊歩道のじぐざぐにして花野かな
大桃を冷やして剥いて丸かじり
丹精を手し取る棚や葡萄園
戦跡てふ地にさわさわと甘蔗
若き声が人に叫びて赤い羽根

2011年11～12月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
指に巻く長さいとしき木の葉髪
散りさうに咲きて十月桜かな
尖りつつ光を宿す冬木の芽
熱爛をほす毒舌にある一理
光陰の一気に加速十二月

横浜 下島 緑
散り敷きてより木犀の庭となる
大野分吹き残したる富士の峰
かやの実を拾ひはじめてきりもなし
園丁の重たげに曳く落葉籠
わが窓に富士近づきて今朝の冬

藤沢 藤田 富子
歴史ある宿に風情の草の花
名月を異郷にありて仰ぐかな
言の葉の一ツ気遣ふ秋思かな
新秋刀魚煙にむせる炭火焼
爽やかに玉砂利踏むや神の杜

さいたま 宮崎 美智子
ウィンドウの秋一色に背を押され
ひとはけの雲染まりつつ秋の暮
秋澄めり坂東太郎しづかなり
乃木坂をのぼり下りつ雲の秋
東照宮の由来聞きをり一葉落つ

綾瀬 岡田 洋子
裂け初めて紅美しき石榴の実
転ぶ子も泣かずにゴール運動会
逆上がりすれば秋天まはりおり
落日を浴びる里山柿熟れる
雑踏を逃れ里山稲穂垂る

町田 小森 まさひこ
イブモンタンになりて枯葉の道を行く
親だけが緊張してる七五三
カウンターに並ぶ女性や河豚を食ふ
ずわい蟹三味の旅奥丹後
大根洗う風背にしてただ洗う